



昨年は国内最後の内戦「西南の役」が終結し、西郷隆盛が没して一四〇年の節目の年でした。そして今年、明治となり近代国家として歩み始めて一五〇年が経ちます。

今回は、西南の役がもたらしたもの

# 西郷隆盛と霧島

その⑧

## 西南の役がもたらしたもの



西南の役直後と思われる鹿児島市城山の風景  
(西郷南洲顕彰館提供)

について紹介します。

### 武士の世の幕引き

明治維新によって国内の権力体制は幕藩体制(地方分権)から明治政府(中央集権)へ、封建主義から資本主義へと大きく変わりました。当時の人々にとっても四民平等、職業選択・居住地移動の自由、教育制度の確立、氏名や選挙権の取得など大きな変化がありました。中でも士族(武家)階級は廃藩

置県にはじまり、徴兵制の導入、<sup>1</sup>秩禄処分、<sup>2</sup>廢刀令などにより、その生活は一変しました。

その十年後、士族による国内最大かつ最後の反乱である西南の役が発生し、明治政府が約八か月で鎮圧します。

鹿児島市の西郷南洲顕彰館には、西南の役で西郷が自決した鹿児島市城山の写真が残されています。山の地肌が見え、草木が生えていないことから西南の役終結直後のものと思われ、不穏な動きを押さえるため、政府軍の兵士が駐屯しています。熊本の植木や田原坂の写真にも同様の特徴が見られることから、西南の役の主要な戦場跡には同じように駐屯兵を配置していたものと思われ。

政府は終戦後も一定の期間、不満を持つ士族たちの動向を注視してきます。組織的な反乱はそれ以降なくなります。これにより鎌倉時代から続いた武士による支配体制が終わり、政府が行財政や軍隊などを統制する中央集権国家の基礎を確立しました。

### 悲劇の引き金にも

政府に不満を持つ人々は武力闘争に代えて、組織と言論を通じて民衆に働き掛ける方向に転じました。<sup>2</sup>自由民権運動

一方、西南の役は政府軍の育



西南の役での白兵戦を描いた錦絵。  
左側が薩摩兵  
(北斗南洲『西南の役53景』より)

成方針にも変化をもたらします。

接近戦では銃弾を補充している間に相手が迫り、最後は刀などで戦う白兵戦になります。剣術を修めた士族が多い薩摩軍は白兵戦に強く、平民出身者が多い政府軍の兵士は敵前逃走する失態を繰り返しました。この苦い経験から、政府軍は武器の優劣や戦術・戦術の検討などよりも「精神教育」を重要視し、「逃げない兵隊」の養成に力を入れるようになります。

このことは後に、日露戦争でロシア軍の倍以上の戦死者を出した<sup>3</sup>旅順での非効率な突撃戦や、太平洋戦争で特攻隊を代表とする「玉碎戦法」への引き金となっていきました。

(文責 Ⅱ 鈴)

※1 旧来の家禄と相応の金(公債)を支給。

※2 国民の自由と権利を要求した政治活動。

※3 旅順攻略ための要衝である「二〇三高地」での攻防戦。とりでに立てこもるロシア軍に、白兵戦で挑んだ。